

## 社会不安の認知的バイアス

### —オンライン・オフラインの観点から捉えた社会不安—

#### Cognitive Bias in Social Anxiety: Social Anxiety in Terms of On-Line and Off-Line

井上 朋子 (Tomoko Inoue) 指導：根建 金男教授

##### 【問題と目的】

社会不安において、認知的要因がその発生と維持に重要な役割を果たしているとされている。不安者の認知を検討する際、情報処理の視点から認知的バイアスの研究がなされてきた。一方、Hirsch & Mathews (1997, 2000) は、社会不安者が、社会的刺激に対して、事実から離れ、否定的な信念など内的な情報に基づいた解釈をする「オフライン」の状態に陥っている可能性を指摘している。本研究では、認知的バイアスが相互に影響を及ぼしあって悪循環に陥っている状態が社会不安であると捉え、「オンライン」・「オフライン」という概念を認知的バイアスの上位概念と仮定し、社会不安を包括的に検討することを目的とした。

##### 研究 1

【目的】 社会不安高群・低群において、社会的刺激（顔写真）に対する反応時間と課題の正答数を比較検討し、社会不安者の「オフライン」状態を確認する。

【方法】 1) 対象者：FNE・SADSの平均点の高低で群分けした、HH(FNE高・SADS高)群10名、HL(FNE高・SADS低)群14名、LH(FNE低・SADS高)群11名、LL(FNE低・SADS低)群12名の計47名(平均年齢=20.06、SD=1.07)。

2) 課題：被験者は、コンピューター画面上に12枚の顔写真を提示され、その中に1枚の異なるターゲット（7種類の情動顔）が存在するか否かを判断するよう教示された。

3) 結果と考察：反応時間について、特性の要因、実験刺激の要因の4×7の分散分析を行ったところ、交互作用が有意傾向であった ( $F(18, 258) = 1.61, p < .10$ )。特にHH群・HL群において、肯定的刺激と比べて、否定的刺激への反応が遅かった。社会不安高群が、肯定的刺激よりも、否定的刺激から注意をそらす傾向が示唆された。

正答数について同様の分析を行ったところ、交互作用が有意であった ( $F(18, 258) = 1.99, p < .05$ )。特にLL群では、否定的刺激と比べて、肯定的刺激に対する正答数が多かった。他者評価不安・回避傾向共に低い群において、否定的刺激よりも、肯定的刺激を正しく捉える傾向が示唆された。

##### 研究 2

【目的】 「オフライン」状態の場面として相互交流のない社会的場面を設定し、社会不安の高群・低群における注意の偏りや解釈、思考内容を比較検討し、社会不安者の「オフ

ライン」状態を明らかにする。

【方法】 1) 対象者：HH群8名、HL群14名、LH群12名、LL群9名の計43名(平均年齢=19.88、SD=1.00)。

2) 課題：被験者は、男性1名女性1名計2名の実験協力者と共に、同じ部屋で3分間過ごした。課題前後で、STAI-S、POMSの『緊張と不安』・『抑うつと落ち込み』・『怒りと敵意』、注意の焦点尺度、緊張度・セルフエフィカシーの単項目の質問に回答した。課題後、課題中の注意、解釈、思考内容に関する半構造化面接を施行された。また実験協力者が、被験者の課題中の様子を行動印象評定尺度で評定した。

3) 結果と考察：課題の前後の質問項目について、特性の要因、測定段階の要因の4×2の分散分析を行ったところ、各尺度において交互作用は有意でなかった。「他者に焦点付けられた注意」において、HH群とHL群の得点がLL群と比べて有意に高く ( $p < .05$ )、社会不安高群が、他者に注意を向けている傾向が示唆された。

課題後の質問項目について、特性の要因の1要因4水準の分散分析を行った。その結果、「他者が気になった」の項目で群の効果が有意であり ( $F(3, 39) = 3.37, p < .05$ )、HL群とHH群の得点がLL群と比べて高かった。社会不安高群が、他者に対する意識が高い傾向が示唆された。

行動印象評定尺度について、特性の要因の1要因4水準の分散分析を行った。その結果、群の効果は有意であり ( $F(3, 39) = 3.10, p < .05$ )、HH群の得点がHL群と比べて高かった ( $p < .05$ )。社会不安高群の中でも、回避傾向を伴わない群とは対照的に、評価不安・回避傾向共に高い群は他者に非友好的な印象を与えている可能性が示唆された。

さらに半構造化面接の結果から、社会不安高群は他者と他者からの評価を否定的に捉える傾向があり、社会的場面で他者に関する思考に捕らわれている可能性が示唆された。

##### 【総合考察】

本研究の結果から、「オフライン」状態とは「社会的脅威に対して意識が高まっているにも拘わらず、脅威を回避している状態。社会的場面であれば直接評価を受ける場面でもなくとも、他者と他者から受ける評価を否定的に捉え、他者に関する思考に捕らわれている状態。」と想定される。さらに、回避傾向を伴う社会不安者は、回避傾向を伴わない不安者よりも悪循環に陥りやすい可能性が示唆された。